

拡張する絵本の世界（前編）

執筆者 KDDI 総合研究所 フューチャーデザイン 2 部門 1 グループ 畑中 梨沙

▼記事のポイント

<サマリー>

「出版不況」と呼ばれるように、今日の出版業界を取り巻く状況は年々厳しくなっている。1998 年には 2 兆 5,415 億円あった書籍の販売額が 2018 年には 1 兆 2,921 億円まで落ち込んでいる。このような厳しい状況下でも、児童書は出版市場において唯一売り上げを伸ばしている。少子化により読者である子どもの数は減少しているにもかかわらず、なぜ児童書は堅調なのだろうか。

児童書の中でも絵本の動向に着目し、堅調な理由を 2 回に渡りレポートする。前編は子どもの読書活動を推進する教育政策と、作品の多様化について考察する。後編では作者と読者をつなぐ人達（出版社、編集者、図書館、書店）のインタビューを中心に、新たな作家や作品を育てる出版社や書店の役割、絵本と触れ合う機会の増加に焦点を当てて考察する。

<主な登場人物>

児童書出版社 絵本作家 図書館

<キーワード>

児童書 絵本 ブックスタート 朝の読書活動

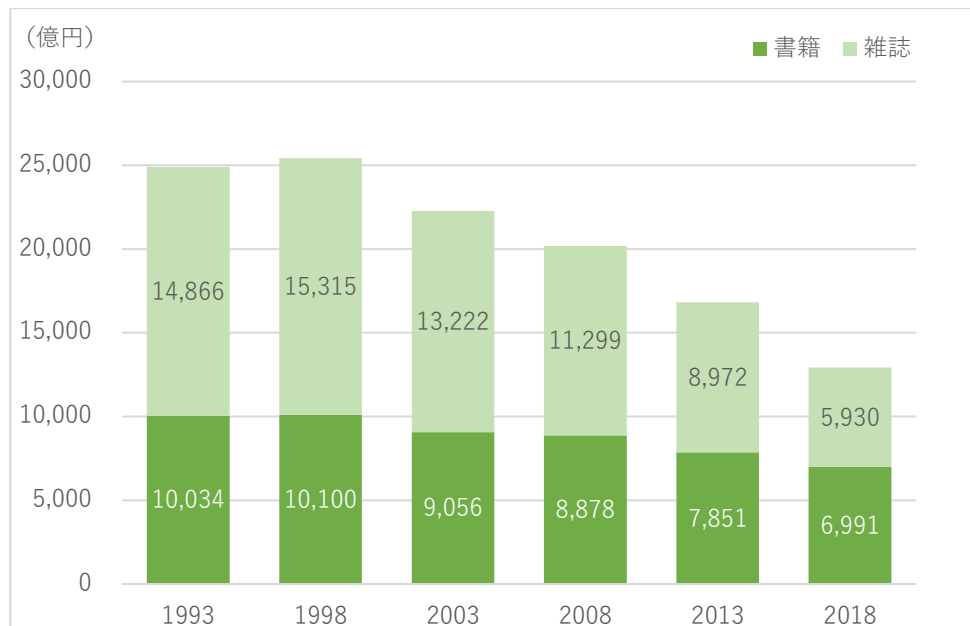
<地域>

日本

1 出版市場の現状

「出版不況」と呼ばれるように、今日の出版業界を取り巻く状況は年々厳しくなっている。全国出版協会・出版科学研究所¹によると、1998年には2兆5,415億円あった書籍の販売額²が2018年には1兆2,921億円まで落ち込んでいる【図表 1】。この20年で半分に縮んでしまった。中でも雑誌はピーク時（1996年）に1兆5,633億円であったが、5,930億円と4割以下まで激減している。

【図表 1】 取次ルート経由の出版販売額推移



（出典：公益社団法人全国出版協会・出版科学研究所『2019年版出版指標年報』）

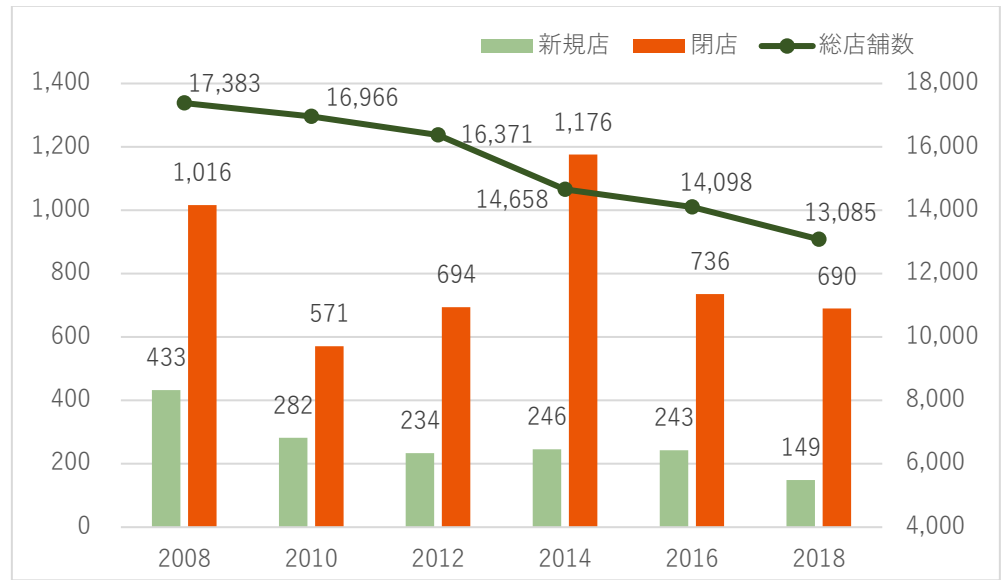
もともと雑誌への依存度が高かった中小規模の書店は、雑誌の販売額減少が大きく影響し、街から姿を消している。また、出版社と書店をつなぐ流通機能を果たす取次会社³の倒産も影響し、【図表 2】に示すように、毎年、新規店の何倍もの店舗が店を畳んでいる。

¹ 公益社団法人全国出版協会・出版科学研究所 <https://www.ajpea.or.jp/index.html>

² 図表1、図表2で示す販売額に電子書籍は含まれていない。児童書の電子書籍化については後編で触れる。

³ 取次会社とは、出版社と小売書店の中間にあって、書籍・雑誌などの出版物を出版社から仕入れ、小売書店に卸売りする販売会社のこと。（出典：一般社団法人日本出版取次協会）

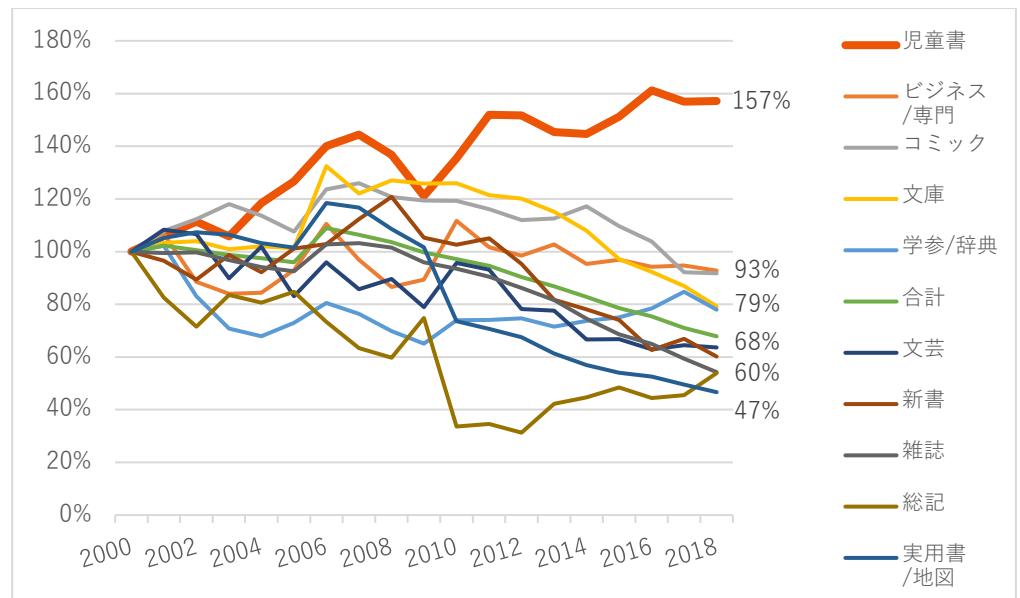
【図表 2】 店舗数推移



（出典：一般社団法人 日本出版インフラセンター 書店マスタ管理センター¹）

このように右肩下がりでの厳しい状況下でも、児童書は堅調に推移している。児童書は出版市場において唯一売り上げを伸ばしている分野である【図表 3】。少子化により読者である子どもの数は減少しているにもかかわらず、なぜ児童書は堅調なのだろうか。

【図表 3】 分類別売上高推移（2000年を起点とした時の売上高の推移）

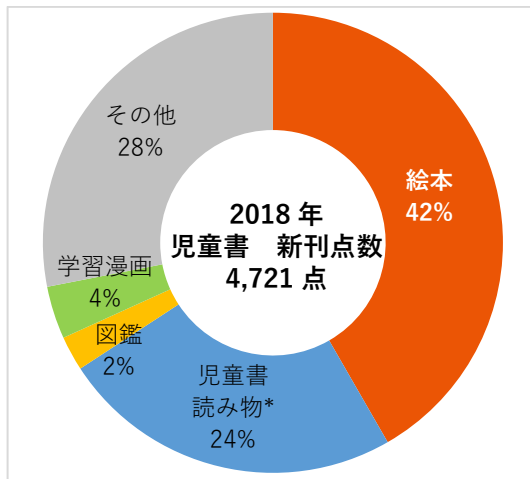


*2006年から出版社直販、2007年からインターネット書店の売り上げを含む
 （出典：日販 営業推進室 出版流通学院『出版物販売額の実態 2019/2009』の
 情報を元に筆者作成）

¹ https://www.jpoksmaster.jp/Info/documents/top_transition.pdf

児童書が堅調な要因を探る前に児童書の分類・構成・ジャンルについて見ておきたい。全国出版協会・出版科学研究所によれば、児童書は【図表 4】のように「絵本」「児童書読み物」「図鑑」「学習漫画」「その他」と分類されている。2018年の新刊点数では、「絵本」が児童書全体の約4割を占める。「絵本」は販売額においても、児童書全体の3割強となっている【図表 5】。新刊点数で絵本に次ぐ「読み物」は2割強、「図鑑」「学習漫画」はまだ点数は少ないものの、伸びているジャンルである。本稿では児童書の中心ジャンルである絵本を対象として考察していく。

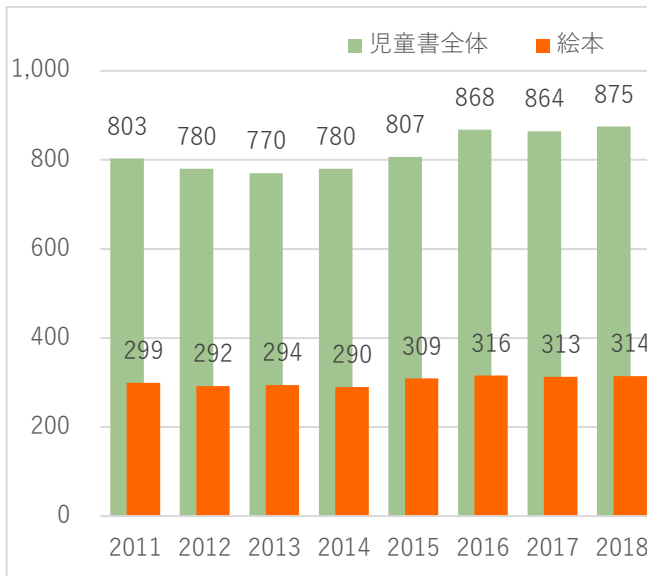
【図表 4】 2018年児童書新刊点数



*児童書読み物はさらに日本の物語、翻訳もの、児童文庫、その他に分類される

(出典：公益社団法人全国出版協会・出版科学研究所『出版月報2019年9月号』)

【図表 5】 児童書、絵本の出版販売額推移



(出典：公益社団法人全国出版協会・出版科学研究所『2019年版出版指標年報』)

ここで本稿の登場人物を紹介しておこう。

- ・ 作家…絵本を描く人。
- ・ 読者…絵本を読む人。読んでもらう子どもも含まれる。
- ・ 書店…絵本を売るところ。
- ・ 図書館・保育所・幼稚園・学校…絵本を貸したり見せたりするところ。
- ・ 出版社…絵本を作るところ。

次節以降、これらの登場人物の活動や、登場人物同士の関係性の変化に注目しながら考える。具体的には教育政策による読書活動の浸透（2章）、作品の多様化によって生まれた新たな読者層（3章）、新たな作家や作品を育てる出版社や書店の役割（後編）、絵本と触れ合う場の増加（後編）、の4つの視点から論じてみたい。

2 教育政策

1999年に衆参両院で採択された「子ども読書年に関する決議」の具体化を図るために、2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」²が施行された。その中で、「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである。」とされた。本法律第10条により、4月23日が「子ども読書の日」と定められ、この日に合わせ各自治体が図書館でおはなし会や司書体験などのイベントを開催している。また、この法律に基づき、子どもの読書活動推進に関する基本方針と具体的方策を明らかにする「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（以下、「子どもの読書基本計画」）が5年毎に閣議決定され³、都道府県と市町村が教育委員会や福祉部局、学校、図書館、民間団体、民間企業等の関係者と連携、協力し子どもの読書活動を推し進めることを求めている⁴。

2.1 0歳からのブックスタート

少子化が進み、3世代世帯が減少する中、子どもとのコミュニケーションを深めるツールとしての絵本が見直されている。その背景として、2000年の「子ども読書年」を契機に始まった「Bookstart（ブックスタート）」という活動がある。

ブックスタートは、自治体が赤ちゃんのいる家庭に無償で絵本を提供し、絵本を介して保護者と赤ちゃんが自然に触れ合うきっかけをつくることを目的にしている。また、絵本を手渡す際に子育てに役立つ情報を紹介し、親子と地域をつなぐ子育て支援としての役割も果たしている。発祥は1992年イギリスで、“Share books with your baby!”を合言葉に活動が始まり、日本は世界で2か国目にこの活動を開始した。2020年1月31日現在、6割の自治体を実施しており⁵、0歳から親子で絵本に親しむという意識が広がっている。

このような流れを受けて赤ちゃん絵本が注目され、各社が赤ちゃん絵本に取り組むようになった。ここ3年、絵本分野で一番売り上げを伸ばしているのは赤ちゃん向け絵本の『だるまさん』シリーズ（かがくいひろし ブロンズ新社）である【図表6】。シリーズ累計604万部の大ヒット作で、0歳から読むファーストブックとして人気を集めている。ほのぼのとしたタッチで描かれた赤色のだるまが「だ・る・ま・さ・ん・が」と左右に揺れ、ページをめくると奇想天外のものに変わっていく、その

¹ 子ども読書年に関する決議（1999年8月9日）

http://www.sangiin.go.jp/japanese/san60/s60_shiryou/ketsugi/145-01.html

² 子どもの読書活動の推進に関する法律（2001年12月）

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/001.htm

³ 子どもの読書活動の推進に関する基本計画は、2002年8月（第一次）、2008年3月（第二次）、2013年5月（第三次）、2018年4月（第四次）にそれぞれ閣議決定されている。

⁴ 第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」（本文）（2018年4月20日）

http://www.kodomodokusyo.go.jp/happyou/hourei_download_data.asp?id=28

⁵ NPOブックスタート <http://www.bookstart.or.jp/about/>

様子に赤ちゃんから大人まで思わず笑ってしまう内容となっている。

【図表 6】 だるまさんシリーズ かがくいひろし著



（出典：ブロンズ新社）

2.2 読書活動の浸透

学校での具体的な取り組みの例として、始業前に10分間読書をする「朝の読書」活動¹が広がりを見せている。生徒の豊かな心を育む目的で1998年に千葉県の高등학교から始まった活動が全国に広がり、2020年2月3日現在、全国の小・中・高等学校の76%（内訳：小学校80%、中学校82%、高等学校45%）が活動を行っている²。「朝の読書」活動の4原則は以下の通り。

- ・ 全校一斉で行う。
- ・ 10分間でも毎朝続ける。
- ・ 読む本は何でもいい。（但し、雑誌やマンガはダメ）
- ・ 本を読むこと以外は何も求めない。（感想文や記録は求めない。本を読んでいるときの楽しく充実した思いを大切にする）

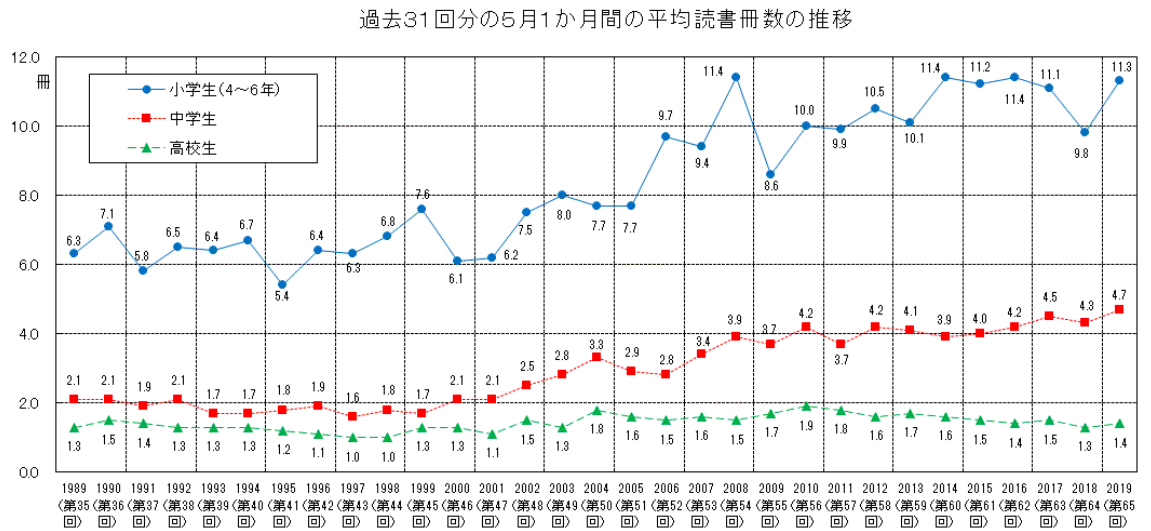
全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で行っている全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況についての調査³によると、2000年ごろまでは平均読書冊数は横ばいだが、2000年を境に、特に、小学生、中学生の平均読書冊数は増加傾向にある【図表 7】。

¹ 朝の読書推進協議会 <https://www.tohan.jp/csr/asadoku/>

² 朝の読書推進協議会 「「朝の読書」全国都道府県別実施校数」、2020年2月3日
https://www.tohan.jp/topics/upload_pdf/asadoku_school.pdf

³ 公益社団法人全国学校図書館協議会「第65回学校読書調査（2019年）」
<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html>

【図表 7】 5月1か月間の平均読書冊数の推移



(出典：公益社団法人全国学校図書館協議会 第65回学校読書調査 (2019年))

自治体によるブックスタート活動により、家庭では赤ちゃんに絵本に親しむという意識が広がり、学校での朝の読書活動は読書習慣の形成や、読書する機会の確保に役立っている。これらの活動以外にも幼稚園教育要領、及び保育所保育指針、学習指導要領の改訂による学校等での読書活動の推進や環境の整備、自治体による図書館の整備・充実が図られており、子どもを取り巻く読書環境は年々改善されている。一方で、高校生、大学生の本を読まない割合（不読率）は依然として高く、約半数の学生は、1か月に1冊も本を読んでいないのが現状である¹。「子どもの読書基本計画」では、読書習慣の形成に向けて発達段階ごとの効果的な取り組みを行うことや、ブックトークや書評合戦（ビブリオバトル）などの活動を通して読書への関心を高める取り組みを充実させていくことを計画している。またスマートフォンの普及等による子どもの読書環境に与える影響を把握するための実態調査や分析を行っていくということである²。

¹ 高校生の不読率は55.3%（公益社団法人全国学校図書館協議会「第65回学校読書調査（2019年）」）。大学生の不読率は48%（全国大学生協共同組合連合会「第54回学生生活実態調査」）。

² 第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」（本文）（2018年4月20日）
http://www.kodomodokusyo.go.jp/happyou/hourei_download_data.asp?id=28

3 作品の多様化

本稿は、児童書、とりわけ絵本が市場で堅調な理由を考察するものであるが、「作品の多様化」こそが、新たな「読者」、新たな「読書体験」を生みだしており、絵本の活況を支えている一番の理由だと考えている。しかしながら、元来、絵本の特徴として指摘されるのが「ロングセラー」である。絵本の販売の約7割は「ロングセラー（既刊書）」である。出版総合商社であり、取次会社大手の株式会社トーハンが発行部数100万部以上の絵本をまとめた「ミリオンぶっく」という特設サイトを公開している¹。そのサイトには、『いないいないばあ』（松谷みよ子/文・瀬川康夫/絵 1967年）、『はらぺこあおむし』（エリック＝カール 1969年）、『きんぎょがにげた』（五味太郎 1977年²）など、40年以上前に出版されたタイトルが並び、また、それらは2018年の売り上げについても未だ好調である。筆者にとっても、絵本と言えば、ほのぼのとしたタッチで描かれ、「勇気」や「やさしさ」など道徳的なテーマや、しつけや遊びを題材にして描かれているものが多い印象を持っている。

長年読み継がれている作品が多い絵本市場ではあるが、新刊点数は増加傾向にあり、毎年約1,500～2,000タイトルの新刊が発売されている。販売シェアについても、新刊のシェアは2015年の26%から2018年は29%と年々上昇している³。

絵本専門店クレヨンハウスを主宰し、総合育児雑誌『月刊クーヨン』の発行人でもある作家の落合恵子はインタビューの中で、「子どもの本は当時と今では、変わりましたか？」という問いに対して次のように語っている。「私の子どもの頃は、大人のお手伝いをする子はいいか、大人が考える「いい子」をつくるために絵本が使われたという感じが強かったんですね。（中略）確実に子どもの本の世界は変わっています。レイズしている、上がっている。」⁴ また、日本女子大学教授で国立国会図書館客員調査員を務めている石井光恵は、「それまでは、絵本というのは何を子どもに語るかという、テーマ主義的に考えられるものでした。（中略）児童文学的・テーマ主義的な絵本観から、美術的・表現主義的な方向へ動いていくのが、1990年代の初めなのです。テーマから解放されて、表現としての絵本の可能性を考えると、それまでになかった絵本の表現を求める傾向が強くなり、画期的な表現を探そうとしていたように思います。」と、語っている⁵。

次節より多様化する作品について具体的に見てみよう。3.1節では、作品テーマの

¹ ミリオンぶっく <https://www1.e-hon.ne.jp/content/cam/2019/millionbook.html>

² 福音館書店 こどものとも年少版3号（1977年6月号）

³ 公益社団法人全国出版協会・出版科学研究所『2019年版出版指標年報』、p127

⁴ 時事通信社 時事ドットコムニュース「クレヨンハウスから見た 子どもと女性の40年 落合恵子さん」、2016年12月8日
<https://www.jiji.com/jc/v4?id=201612kureyonh0001>

⁵ 石井光恵「子どもと文化を架け渡す絵本」『絵本と子どもの原点を見つめる—子どもの成長発達と絵本—平成30年度国際子ども図書館児童文学連続講義録』国立国会図書館、pp.13-30

多様化により、絵本のバリエーションが拡大してきたことを示す。3.2節では、異分野の人が絵本を書くことで新たな読者層が獲得されることを示す。3.3節では、アートとしての絵本が新たな読書体験を創出したことを示す。3.4節では、絵本の制作スタイルの多様化により読者の獲得方法が増えたことを示す。

3.1 テーマの広がり

絵本は時代の空気、社会を反映する文化である¹。1991年にバブル経済が崩壊してから、世界ではアメリカ同時多発テロ（2001年）やリーマンショック（2008年）、国内では阪神淡路大震災（1995年）や東日本大震災（2011年）が起り、社会的に不安な空気が広がった。一方、1985年に「男女雇用機会均等法」、1999年に「男女共同参画社会基本法」が制定され、男女が互いに人権を尊重することが義務付けられたことを始めとして、2000年代に入ってから性別だけでなく、年齢、人種、障害の有無、貧富の差、宗教、ライフスタイルの違いなど、徐々にではあるが、異なる価値観を認め多様性を受け入れる流れになってきた。そのような時代の空気を反映して、絵本で扱われるテーマも変化している。

働く母親の姿を描いた絵本『ぼくのママはうんてんし』（おおともやすお 福音館書店 2012年）では、電車の運転士の母親と看護師の父親が登場する。誕生日をめぐるエピソードを通し、共働きの両親の姿と家族が支え合う日々の暮らしが丁寧に描かれている。また、『たからものはなあに？』（あいだひさ/作、たかばやしまり/絵 偕成社 2009年）は、赤ちゃんの時に養子として迎えられた子どもの成長を通して、家族や愛について考えさせられる内容となっている。ライフスタイルの変化が、新しい家族の形として作品に反映されている。

作家の中村うさぎが新宿二丁目で働くイラストレーターの絵に衝撃を受けて創作した『ぼくは、かいぶつになりたくないのに』（こうき/絵、中村うさぎ/文 日本評論社 2018年）では、両親からの虐待、クラスメイトからのいじめ、同性愛者であることで受けた差別を自分の内側に巣食う怪物に浸食されながらも必死に抗う様子が描かれている。作者の行き場のない孤独や苦しみが悲痛な叫びとなって読む者の心を締めつける。「私は今までそのような逆境を自分の心の中に棲んでいる怪物と人間の狭間で生きてきました。未だにその怪物を制御するのは難しい。しかし、差別を受けたことのない温かい家庭環境で育った人も、心の中には常に怪物が巣食っていて、いつそれが暴れ出すかわかりません。私の叫びが皆様の怪物にも届くでしょうか…。」と作者のこうきは語っている²。

¹ 国立国会図書館国際子ども図書館「児童書ギャラリー案内用リーフレット」
<https://www.kodomo.go.jp/use/room/gallery/pdf/leaflet.pdf>

² Web日本評論「一冊散策『ぼくは、かいぶつになりたくないのに』（絵：こうき、文：中村うさぎ）」、2019年2月4日 <https://www.web-nippygo.jp/11639/>

【図表 8】 ぼくは、かいぶつになりたくないのに



（出典：日本評論社）

また、以前はあまり扱つかわれなかったテーマの絵本が出版されるようになってきた。例えば「死」についてである。1977年に出版された『100万回生きたねこ』（佐野洋子 講談社）の大ヒットはあるものの死について語られる作品は多くはなかった。しかし、1998年に死をテーマに扱った2冊の本、『葉っぱのフレディ いのちの旅』（レオ・バスカーリア/作、みらいなな/訳 童話屋）と『いつでも会える』（菊田まりこ 学研プラス）が出版され、どちらもミリオンセラーとなった。1982年頃から上智大学教授のアルフォンス・デーケンが、「死」を考えることから「より良く生きる」ことについて考える「死への準備教育」を提唱し広めたことに加え、1995年の阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件、1997年の神戸連続児童殺傷事件などの大きな事件や災害を背景に、「死」は身近にあるものであり誰にでも訪れるものであるとして多くの人に受け入れられたのではないか。2000年以降には『デューク』（江國香織/作、山本容子/絵 講談社 2000年）、『ミッフィーのおばあちゃん』（ディック・ブルーナ/文・絵、松岡亨子/訳 講談社 2005年）、『かないくん』（谷川俊太郎/作、松本大洋/絵 東京糸井重里事務所 2014年）、『このあとどうしちゃう』（ヨシタケシンスケ ブロンズ新社 2016年）など人気作家たちも死を扱った作品を出版している。

2011年に日本を襲った東日本大震災と原発事故は、多くの人を動かした。自分には何ができるのだろうか。作家たちにとっても同じである。震災の怖さや記憶を風化させないように描かれた絵本、「失うこと」に寄り添った絵本、「かけがえのない日常」の大切さを暖かく描いた絵本などが出版された。それぞれのアプローチで描かれた作品はいずれも心を打つものばかりだ。

『希望の牧場』（森絵都/作、吉田尚令/絵 岩崎書店 2014年）は福島第一原子力発電所からほど近い、警戒地域に取り残された実在する牧場を描いた作品である。放射能を浴びて出荷できない牛たちを殺処分するように言われながらも世話し続ける牛飼いの姿を「悲しみ」ではなく「強さ」をこめて絵本に残せたらと考えました」

と作者の森絵都は語っている¹。『あさになったのでまどをあけますよ』（荒井良二 偕成社 2011年）では、何気ない日々の繰り返しのの中に生きる喜びや幸せがあることが描かれた。震災後、何度も被災地を訪れた作家が生みだした作品に、優しい希望を感じる。

誰かを失った時や辛い経験をした時に、シンプルな言葉と絵で語られる絵本だからこそ、読者に届くものがある。

3.2 異分野の人が書く「絵本」

絵本以外の場で活躍している人が作品の制作に携わることで、普段あまり絵本に関心がない大人が絵本を手取るきっかけを与えている。また、さまざまな作家の登場が絵本の表現の枠を押し広げている。

「発想えほん」シリーズで人気を集めるヨシタケシンスケは広告美術やイラストの分野でキャリアを築いてきた人物だが、2013年、40歳の時に『りんごかもしれない』で絵本作家としてデビューした。第6回MOE絵本屋さん大賞²第1位の受賞を皮切りに、その後も出版する作品で数々の賞を受賞している。何気ない日常を独特の感性でとらえ、物事をいろいろな角度から見たり想像したりするヨシタケシンスケの世界観は多くの大人に気づきを与えている。固定観念で凝り固まった頭に「答えはひとつではない」「いろいろな選択肢や可能性がある」ということを気づかせてくれる³。大人に受入れられる絵本は必ずしも子どもの好みに合うとは限らないが、ヨシタケシンスケの作品は大人だけでなく子どもにもとても人気がある。2018年にポプラ社が主催した小学生がえらぶ!“こどもの本”総選挙 ではベストテンに4作品（2位、3位、7位、10位）がランクインした。ヨシタケシンスケはいまや押しも押されぬ人気絵本作家のひとりである。

¹ EhonNavi「シリーズいのちのえほん」
<https://www.ehonnavi.net/special.asp?n=1967>

² MOE絵本屋さん大賞（2008～）は、絵本専門雑誌『月刊MOE』（白泉社）が主催する新刊絵本の賞。全国の絵本専門書店や児童書売場担当3000人にアンケートを実施し、年間絵本ランキング30冊を選出する。

³ EhonNavi「ヨシタケシンスケさんの絵本が愛されるワケ。大人気絵本作家さんを大解剖！」、2018年2月10日 https://style.ehonnavi.net/ehon/2018/02/10_120.html

数多くの受賞の一方で、「ある種のキャッチーさが売りかと思うが、子どもとともに読む絵本にそれが必要なのか、きちんと考えたいものである。」¹、「コミックエッセイのような視点と手法で矢継ぎ早に出版された手ごわい子どもを描いた作品ばかりで、肝心の子どもが置き去りとされているようにも感じられる。」²と言った厳しい指摘もある。

【図表 9】 MOE2018年12月号 巻頭特集ヨシタケシンスケ 好き？



（出典：白泉社MOEウェブ³）

『モチモチの木』（斎藤隆介/作、滝平二郎/絵 1971年）や『はれときどきぶた』（矢玉四郎 1980年）で知られる岩崎書店は、異分野の人が書く絵本を多く出版している。お笑い芸人のサンドウィッチマンや笑い飯、落語家の立川志の輔のネタを元にした絵本シリーズ「お笑いえほん」、宮部みゆき、京極夏彦、恩田陸らミステリーや幻想文学のジャンルで活躍している人気作家を迎えて制作した「怪談えほん」シリーズ、恋をテーマに直木賞作家の桜庭一樹や辻村美月が手掛けた「恋の絵本」シリーズ等を刊行している。中でも、2011年10月に始まった「怪談えほん」シリーズは、メディアやSNSで度々取り上げられ、普段絵本を読まない大人の間で大きな反響を呼び、怖い絵本ブームを巻き起こした⁴。2018年には怪談えほんコンテストを実施し、一般から多くの作品が投稿され、現在第3期がスタートするという人気ぶりである。

¹ 原幸子「児童図書出版の全般・出版流通 2012年～2016年―書店の現場から」『年報こどもの図書館 2017年版』日本図書館協会、pp.286-291

² 金子浩「絵本」『年報こどもの図書館 2017年版』日本図書館協会、pp.292-295

³ 白泉社MOEウェブ <https://www.moe-web.jp/>

⁴ ダ・ヴィンチニュース「あの『遠野物語』を本格絵本化！京極夏彦が手がける「子供向けらしからぬ」新“怖い絵本”『やまびと』と『まよいが』」、2016年6月5日 <https://ddnavi.com/news/304401/a/>

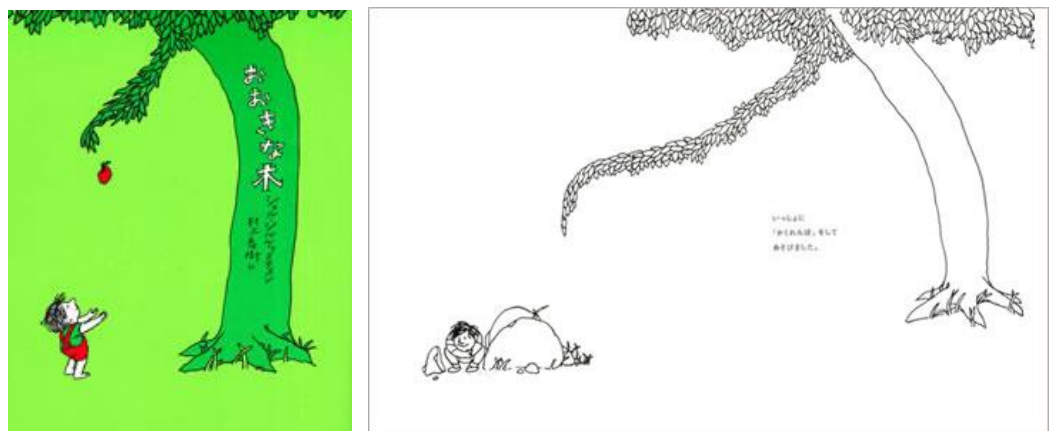
【図表 10】 怪談えほんシリーズ



（出典：岩崎書店 怪談えほん特設サイト）

世界的に有名な作家である村上春樹は、シェル・シルヴァスタインの名作『おおきな木』（2010年 あすなろ書房）や、映画『ポーラ・エクスプレス』の原作としても知られるクリス・ヴァン・オールズバーグの『急行「北極号」』（2003年 あすなろ書房）など、15作以上の絵本を翻訳している。村上春樹の熱狂的なファン“ハルキスト”ならずとも、彼が翻訳したというだけで、読んでみたくなる大人の読者は大勢いるだろう。『おおきな木』は、日本では本田錦一郎訳で1976年に篠崎書林より出版され長く読み継がれてきた名作であるが、2010年に村上春樹が翻訳したことで話題を呼び、改めて注目された。旧訳版（本田錦一郎 篠崎書林）と新訳版（村上春樹 あすなろ書房）が読み比べられ、未だにブログ記事や本のレビューが多数掲載され続けている。

【図表 11】 村上春樹 訳『おおきな木』



（出典：あすなろ書房）

『おおきな木』は、幼い男の子が成長し、老人になるまで温かく見守り続ける一本の木の話である。中年になった男が遠くへ行きたいと木の幹を切り倒して去っていく場面で、本田錦一郎は「きは それで うれしかった・・・ だけど それはほんとかな。」と訳しているのに対し、村上春樹は「それで木はしあわせに・・・なんてなれませんよね。」としている。また、訳者あとがきで、村上春樹は「人の心を本当に強く打つのは多くの場合、言葉ではうまく説明できないものごとなのです。だからこそ、この本は世界中で多くの人々の手に取られ、何度も何度も読み返されてきたのでしょ。う。」と書き残している。

その他にも、漫画家やタレント、学者など、それまで絵本と縁のなかった人が絵本の世界に足を踏み入れている。【図表 12】にその一端を示す。

【図表 12】異分野の人が携わった作品

ジャンル	作者名/翻訳者名	主なタイトル	発行年
作家	村上春樹	「ポテト・スープが大好きな猫」 「わたしのおじさんのロバ」	2005年 2018年
	宮部みゆき	「悪い本」	2011年
	京極夏彦	「いるのいないの」 「ざしきわらし」「かっぱ」	2012年 2016年
	恩田陸	「かがみのなか」 「おともだち できた？」	2016年 2017年
	角田光代、西加奈子	「字のないはがき」	2019年
	穂村弘	「恋人たち」 「まばたき」	2012年 2014年
漫画家	松本大洋	「かないくん」	2014年
	浦沢直樹	「泣いた赤鬼」	2011年
タレント	近藤麻理恵（こんまり）	「キキとジャックス なかよしがずっとつづく かたづけのまほう」	2019年
	室井滋	「しげちゃん」	2011年
	北野武	「ほしのはなし」	2012年
	太田光	「絵本マボロシの鳥」	2011年
	西野亮廣（キングコング）	「えんとつまちプベル」	2016年
	福德秀介（ジャルジャル）	「まぐらのまーくん」	2017年
	山崎静代（南海キャンディーズ）	「すきすきどんどん」	2009年
歌手、アーティスト	木村カエラ	「ねむとココロ」	2018年
	小沢健二	「アイスクリームが溶けてしまう前に （家族のハロウィーンのための連作）」	2017年
	高橋久美子 （チャットモンチー）	「赤い金魚と赤いとうがらし」 「おかあさん（はね）」	2017年 2017年
	ポール・マッカートニー	「あの雲のむこうに」	2005年
	ボブ・ディラン	「はじまりの日」	2010年
学者	福岡伸一（生物学）	「ガラパゴス」	2013年
	本川達雄（生物学）	「ナマコ天国」	2019年
	森田真生（数学者）	「アリになった数学者」	2018年
	開一夫（発達認知科学）	「もいもい」「うるしー」	2017年
	カール＝ヨハン・エリオン （行動科学）	「おやすみ、ロジャー 魔法のぐつすり絵本」 「だいじょうぶだよ、モリス 「こわい」と「いやだ」がなく なる絵本」	2015年 2018年

（出典：各出版社の情報を元に筆者作成）

3.3 アートとしての「絵本」

絵と文で構成される絵本の「絵」の部分に焦点を当ててみる。絵本は子どものものという意識が強かったためか、美術的価値が認識されるようになったのはここ20～30年ほどだという。ちひろ美術館の創設者である松本猛は、2004年に次のように語っている。「少し前までは、絵本を美術作品と考える人はきわめて少なく、絵本原画は散逸の一途をたどっていた。日本の公立美術館は、近年ようやく絵本の芸術性や文化的重要性に気づきはじめ、絵本原画展を各地で開催するようになってきた。」¹

1990年代から芸術家が絵本を手掛ける作品が見られるようになった。日本の現代アートを代表する芸術家である大竹伸朗の『ジャリおじさん』（福音館書店 1994年）、奈良美智の『ともだちがほしかったこいぬ』（マガジンハウス 1999年）、草間弥生の『不思議の国のアリス』（グラフィック社 2013年）など。芸術家が描いた絵本は画集として見ることもでき、手元へ置いておけるアート作品にもなる。大切な人への贈り物としても適している。最近では画家のjunaidaが宮沢賢治の世界を描いた『IHATOVO』シリーズ（サンリード 2013年～）や『Michi』（福音館書店 2018年）を出版して話題となった。見る人は緻密に描かれた不思議な世界に引き込まれ、想像を掻き立てられる。2019年11月に発売された『の』（福音館書店）はAmazonで一時在庫切れとなる程、好評を博した²。

【図表 13】 junaida 『Michi』



（出典：福音館書店）

絵本作家の酒井駒子やヒグチユウコ、イラストレーターの宇野亞喜良の描く世界は、単純に可愛いでは済まされない美しさがある。彼らの描く世界には憂い、儂さ、繊細さがある。独特な世界観は絵本以外の本の装画などにも数多く取り入れられ、

¹ 松本猛「美術作品としての絵本」 ACCUニュース No.343 2004.5、pp.2-4
<https://www.accu.or.jp/archives/jp/profile/accunews/news343/343-01.pdf>

² Junaida (@junaida_oekaki) Twitter 2019年12月9日ツイート
https://twitter.com/junaida_oekaki/status/1204273227863691264

高級ファッションブランド¹、化粧品メーカー²とのコラボレーションやグッズの販売などもされており、大人の女性に人気がある作家たちである。酒井駒子の『金曜日の砂糖ちゃん』（偕成社 2003年）は、子どもの世界を描きながらも静けさや寂しさを感じさせる作品である。ヒグチユウコの『ふたりのねこ』（祥伝社 2014年）は、愛らしさの中にダークさが漂う不思議な世界観に浸ることができる。宇野亞喜良の『あのこ』（BL出版 2015年）は1966年理論社より刊行された後、長らく絶版となっていたが2015年に復刊された。終戦間際のある村に疎開してきた馬と話ができる「あのこ」に起きる儂い物語が神秘的で繊細なタッチで描かれている。

【図表 14】 酒井駒子、ヒグチユウコ、宇野亞喜良の手掛けた絵本



（出典：左から偕成社、祥伝社、BL出版）

文字がなく絵だけで構成されている作品は、絵でストーリーを表現する力強さがある。1986年に出版された『アンジュール ある犬の物語』（ガブリエル・バンサン BL出版）は、捨てられた犬が街をさまよひ、ひとりぼっちの子どもと出会う様子を鉛筆だけで描いた文字のない絵本である。犬の表情や姿が人の心を揺さぶる。2012年にはグレン・グールドのピアノにのせてアニメーション化された³。オーストラリアの作家ショーン・タンの『アライバル』（河出書房新社 2011年）もまた全編モノクロの絵だけで構成された作品である。移民たちが自分の居場所を求めて新たな土地で出会う文化の違いへの戸惑いや、過去を捨てなければならない辛さ、そこで掴んだ幸せを描いた作品は、文字がないからこそ感じさせるものがある⁴。世界各国で多数の賞を受賞しているショーン・タンの作品は、映画関係者や演劇関係者の興味も引き、映像化されたり、舞台上で上演されたりしている⁵。

¹ Gucci×ヒグチユウコ コレクション <http://yukohiguchi.gucci.com/>

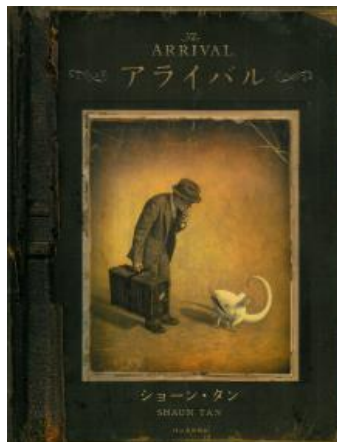
² 資生堂「マジョリカ マジョルカ」期間限定プロモーションサイト「マジョリ画」を制作した面白法人カヤックのHP <https://www.kayac.com/service/client/1442>

³ 映画「アンジュール」公式Webサイト <http://kitty.co.jp/unjour/>

⁴ Ehon Navi「レビュー「アライバル」みんなの声」
https://www.ehonnavi.net/ehon00_opinion.asp?no=70129

⁵ ショーン・タン ホームページ <http://www.shauntan.net/>

【図表 15】 ショーン・タン 『アライバル』



（出典：河出書房新社）

3.4 進化する絵本作家と制作スタイル

1歳半頃の子どものよくある行動を描いて多くの共感を得て話題となったminchiの『いっさいはん』（岩崎書店 2016年）のように、他のジャンルでも起こっている現象ではあるが、SNSがきっかけで書籍化された絵本も登場している。

お笑い芸人キングコングの西野亮廣が制作した『えんとつ町のプペル』（幻冬舎 2016年）は、業界の常識を覆す方法で作られたことで作品が出来上がる前から話題となった。33名のクリエイターと分業したり、制作費をクラウドファンディングで集めたり、多くの人を巻き込むことでファンを増やしていった。

これまでもあった絵と文をそれぞれ分業するのではなく、絵と文をユニット（2人）で作り上げていく制作スタイルの作家が登場している。2000年以降、tupera tupera（2002年～）、accototo（2003年¹～）、ザ・キャビンカンパニー（2009年～）、はらぺこめがね（2011年～）などがデビューしている。どのユニットも活躍の場が絵本だけにとどまらず、展覧会やワークショップの開催や、テレビ番組のアートディレクション、雑貨のデザインなど多彩である。

¹ accototoの活動開始時期は、公式に発表されているものがなく、本稿ではデビュー作『うしろにいるのだあれ』（ふくだとしお 新風舎 2003年）の発行年を記載

【図表 16】『ぼくと わたしと みんなの tupera tupera 絵本の世界展』



（出典：子育て情報誌kodomoe（コドモエ）web¹）

このようにSNSで発信したり、クラウドファンディングで制作費を募ったり、ワークショップを開催するなど、作家自身が自ら積極的に読者につながる活動を行うことで、新たな読者を増やしている。

4 まとめ

本稿では、2000年前後から絵本市場が堅調に推移してきている要因を、教育政策の側面および、作品の多様化の側面から取り上げてきた。政策面では、自治体主導の「ブックスタート」活動、学校での「朝読書」により絵本や児童書を読む習慣化に効果をあげている。また、子どものものとされている絵本であるが、時代の変化を反映して以前は描かれなかったテーマの作品が出版されるようになったり、異分野の作家が携わる作品が登場したりすることで絵本の幅が押し広げられてきた。加えて、絵本の芸術的価値が認められるようになり、アートとしての作品も続々と誕生している。このような変化により作品が多様化している。さらに、自ら積極的に読者を獲得する作家も登場してきた。

後編では、作者と読者をつなぐ人達（出版社、編集者、図書館、書店等）のインタビューを中心に、新たな作家や作品を育てる出版社や書店の役割、読者が絵本と触れ合う機会に焦点を当てて考察する。

¹ 子育て情報誌kodomoe（コドモエ）web <https://kodomoe.net/>

■参考文献

【書籍】

- ・ 小野明 編著『絵本の冒険「絵」と「ことば」で楽しむ』フィルムアート社、2018年
- ・ 国立国会図書館国際子ども図書館 編『絵本はアート、絵本はメディア 平成29年度国際子ども図書館児童文学連続講義録』国立国会図書館、2017年
- ・ 国立国会図書館国際子ども図書館 編『絵本と子どもの原点を見つめる—子どもの成長発達と絵本—平成30年度国際子ども図書館児童文学連続講義録』国立国会図書館、2019年
- ・ 児童図書館研究会 編『年報こどもの図書館 2012-2016：2017年版』日本図書館協会、2018年
- ・ 全国出版協会出版科学研究所 編『出版指標年報 2019年版』全国出版協会出版科学研究所、2019年

【雑誌】

- ・ 「もう一度読みたい! 読み継いでいきたい! 平成生まれの名作絵本」『月刊MOE』2019年5月号, pp.59-67.
- ・ 「絵本 好調の背景を探る」全国出版協会出版科学研究所『出版月報』2016年6月号, pp.4-11.
- ・ 「児童書マーケットを検証する」全国出版協会出版科学研究所『出版月報』2019年9月号, pp.4-13.

【ウェブサイト】

- ・ 国立国会図書館国際子ども図書館「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」 <https://www.kodomo.go.jp/jcl/index.html>

【執筆者プロフィール】

氏 名： 畑中 梨沙（はたなか りさ）

所 属： 株式会社KDDI総合研究所 フューチャーデザイン2部門

経 歴： 大学で英米文学を専攻。暮らしを豊かにするものに関心があり、在学中に雑貨コーディネーターの専門学校へ通う。大学卒業後、販売や営業事務などを経験したのち、2008年より株式会社KDDI総研（現 KDDI 総合研究所）に勤務。学生の頃より絵本に興味があったが、出産を機に改めて絵本の世界の奥深さに魅了される。好きな絵本『フレデリックーちょっとかわったのねずみのはなし』（レオ・レオニ/作、谷川俊太郎/訳 好学社 1969年）